

■ 第5セッション ■

多分野的研究から見る内陸西北部の社会と文化



報告

田村和彦



コメント

馬場毅

吉原和男

小熊誠



自由討論・質疑応答

座長

櫻井龍彦

コーディネーター

高明潔

.....

2006年7月16日

●**座長（櫻井）** — 座長を務めます名古屋大学の櫻井です。どうぞよろしくお願ひします。

このセッションのテーマは「多分野的研究から見る内陸西北部の社会と文化」です。ここで言う「多分野的研究」というのが何を指しているのか、私はちょっとわかりません。田村さんご自身はご専門が人類学でありながら、今日は歴史学にも触れるようなお話をしてくださるという意味で多分野的研究になるのだと思います。いまいろいろな分野で歴史の記憶という概念が使われて、研究が進んでおりますけれども、それを導入した研究報告をしてくださることになっています。

田村さんは、ご承知のとおり陝西省の関中平原で農村調査をおこなってこられまして、その村落の構成員の姓の問題、在来の宗族と外来の宗族との対立をめぐる問題、あるいは葬送儀礼の問題などについて、これまで論文をご発表してきました。そういうフィールドワークの調査のなかで、しばしば19世紀の回民起義の伝承を耳にすることがおありで、その歴史の語られ方に関心を抱いて資料を収集してこられました。今日はこの起義について、もっぱら漢族から見た回民蜂起事件の意味するところを、歴史における記憶、あるいは記録の方法論の問題にも触れながら、お考えになるところをご発表いただきたいと思います。

では、どうぞお願ひします。

◆第5セッション報告◆

歴史記憶をめぐって —西北「回民起義」に関する語り—

田村 和彦
<福岡大学>

1 問題の所在

1-1 口述と記述「歴史」の記憶のあり方をめぐって

本発表は、1862年から翌年、および1869年に陝西省中部地域に発生したムスリム(以下、文脈に応じて回民、回族と表記する)による蜂起を題材とし、事件の当該地域に居住する漢族の記憶のあり方を中心に検討するものである。発表者は漢族の研究を行っており、フィールドにおいても主要なインフォーマントは漢族の人々である。この点について、既に大きな限界を抱えていることを予め断っておきたい。どの程度漢族と少数民族研究の接合という主題に沿うものとなるかはのちに議論の中でご批評いただくとして、かつて多くの回民と漢人が居住した地域でどのように回族との関係が捉えられているか、事件の記憶を媒介に報告する。

資料批判や文字資料の読解など歴史資料を扱う上でのトレーニングを受けていない発表者が限られた資料から上述の大きなテーマを扱うことには以下の意図がある。

回民蜂起の概要や起源、経過、その影響については既に歴史学による全体的な、また個別事象についての詳細な分析がある。中国国内においてもそれぞれの事件を位置づけ、中国史を構成する希求のなかで、回民の蜂起が民族的基盤に基づく反封建運動と布置したことから、歴史資料や民族史のなかで盛んに論じられてきた。これらは事実関係の探求や「我々」の過去を固定化する試みでは

あるが、同時に情報の受け手として明確な消費者を意識したものではなかった。言い換えれば、認識枠組みの差異から、事件の発生した地域に住まう人々がここで編み出された歴史を共有せず、異なる歴史を生きていることが十分に検討されてこなかった。中国国内では、たとえそれが歴史的産物であれサバルタンといった角度から彼らの事件へのまなざしが掬い取られることはなく、これらの分析枠組みを用いて現地の調査が進められるといったことから、自らの土地についてのある種の語り自らの認識とかかわりのない様式で単声的に進行するという奇妙な事態を招いた。ここに現われる問題群は、民族誌のオーディエンスの問題やオリエンタリズム論といった形をとって近年の人類学的研究のなかで繰り返し提出された主題でもある。本発表では、フィールドで聞かれる他方向的で断片的である口述を、歴史学の豊富な蓄積を参照としつつ人類学の立場から報告することで、各方面からのご教示を請う次第である。

1-2 人類学的中国研究におけるコミュニティスタディの超克の方向性としての歴史意識

二つ目は、中国をめぐる人類学の状況に関する私的自省に基づく意図である。近年、様々な制約があるとはいえ部分的な現地調査が可能となり、地域的な偏りはあるものの集中的な特定地域の研究が続々と報告されている。こうした傾向は歓迎されるべきものではあるが、ここで得られた知見はどのような形でより大きな議論と結びつき、新たな中国社会への理解となってゆくのであろうか。早い時期からコミュニティスタディの手法が紹介された中国研究においては、緻密なデータの蓄積と同時に、コミュニティスタディだけでは明らかにできない諸相への関心が維持されてきたといつてよい。この点は、中国研究において重要な意義を持っていると考える。村落を越える人的紐帯や宗族、あるいは人の移動や経済関係をもとに「地域」を設定するなどの研究が試みられ、中国社会を検討するうえで大きな影響を与えてきたと振り返ることができるのであれば、今後どのような対象と視点を得る、あるいは維持発展させることで、人類学的手法を生かしつつ村落を越えた問題を扱おうのか改めて考えてみたい。

一つの方向としては、早い段階から指摘されてきた歴史に関わる問題系であろう。歴史資料を用いた人類学的中国研究は既に様々な形をとって行われてきたが、社会史あるいは民衆史と呼ばれる領域が中心であったように思われる。それは文字化された資料が少ない分野で、歴史再構築の補助的な資料という意味合いもあって、現地調査、特に口述の資料が用いられる傾向と関連する。しかし、発表者は状況によっては正史として記録されている事件についても人類学的な手法を試みる意義があると考え。その場合、とくに本発表で扱う事例についていえば、厳密な歴史像の再構成というよりは現在を生きる人々にとって意味を見出せる、今日の状況を説明するために遡及的に発話される歴史であって文字記録とはその性格を異にするものと考え。この意味で、ブロックの指摘に習ってこれら歴史に関わる共有された知識をとりあえず「記憶」とした。これは個人の認知作用のあり方がそのまま社会的な事象へと拡大できるという意味ではない。より適切な用語があれば変更することも念頭に置きつつこのような表記としたのは、過去に関する様々な事実関係のなかから記録する意味を見出し、語ることで再び人々に共有されてゆく過程を繰り返した、一定の体系性を持った、ときに情緒的な作用を伴う知識群を取り上げるためである。

当然、伝承過程での改編や個人の語りが起こる過程での選択性を考えねばならないが、本発表で指摘するように、1800年代後半から現在に至るまで文字記録においても物語性を志向した事実関係の取捨選択が行われていることが確認できる。問題はおそらく改編がなされるかどうかではなく、口述される歴史では、解釈しなおされてゆく過程を検証することができない点にあらう。よって、

ここでは、後にみるように口述と一部の固定化された文字資料が多く共通内容をもつことを確認しつつも、事件に関する社会的な記憶を歴史再構築の直接的な資料とは位置づけず、あくまで現在の人々の生活を意味づける枠組みと限定して捉えておきたい。

1-3 発表者のフィールドの状況

第三には、回民蜂起の主要地点付近で長期の調査を行う機会に恵まれたことから調査活動の過程で関連する語りに遭遇した。これらの(地域の人々にとっての)「我々」の歴史は、事件そのものを口承伝承として語るものもあるが、多くは村の生活習慣の変化や客戸の移民理由、婚姻規則、居住に関する逸話、神秘的ですらある得財古譚などに分散して記憶され言及されていた。これらは生活の諸相に埋め込まれているため、短期の集中調査では表出することが少ないものの、当該地域の現在を理解するためには重要な意味を持つ。とくに、文字資料には調査した周辺村落が紀元前から記載されているにもかかわらず、村落内に残る物質的な記録や人々の記憶からは遠い過去をうかがわせる資料がほとんどない状況にあつて、インフォーマントの語る過去の起点が回民蜂起にあることが発表者の関心を引いた。このため、人類学的手法において検討可能な、現在の地域社会を検討する際の近過去として調査者側の遡及起点もこの事件に措定した。この第三目は、フィールドにおける歴史記憶深度の状況に従った結果であり、また村落社会の変遷を考察するうえでの作業上の必要でもある。

以上の理由から、同治年間に発生した西北地区での回民蜂起、特に陝西省中部地域で得られた文字、口述の資料を軸として、民族のクロスオーバーする歴史記憶のあり方をめぐる報告を行う。

2 地域の文字資料から見た回民蜂起

本発表では、まずはじめに当該地域の回民起義に関する文字資料について簡単な整理を行う。資料全体を詳細に検討するという方法はとらず、後に述べる口述の記録を得た地域についての事項が記録されている部分を比較する。この作業にあたって資料の作成された時期から資料を三つの範疇に分類する。

- ① 1890年代から1949年までの地方志の記載
- ② 1949年前後の回民起義に関する記載
- ③ 1980年代以降に刊行された新しい地方志における記載

比較作業の結果、①に該当する清朝期の資料と民国期の資料では記述に大きな差異が見られず、(当該地域にとって)外部からやってきた蜂起軍が当該地域に大きな被害をもたらしたとする、地域秩序の点から記述されていることが確認できる。注目に値するのは、政権が移行してもすぐに地域社会の記憶が転換したわけではなく、回民蜂起に関していえば、あくまで外部からの「賊」とその鎮圧という枠組みの中で現地の人的、物的被害の状況が記録されている点である。理由として、記録を記した人々が大きく入れ替わることなく、事件を位置づける強力な様式が構成されなかったことで、旧来の認識が維持され記述が踏襲されたものと思われるが、この点については機会を改めて検討するものとする。

①の記述は、現在の地方志との間に大きな乖離があるが、このような記述に変化が現われる転換期として②の時期をとりあげる。中華民国期には既に回民蜂起と同時期の太平天国運動への評価の

転換が複雑な様相を呈しながら行われているようだが、調査不足によりここでは検討することができない。ただし、少なくとも今日の地方志の記述を正当なものとして支える役割を果たしているのは、范文瀾らの示した中国近代史の枠組み、白寿彝らのまとめた『回民起義』で示された事件の読み解き方であると考えられるため、これを②の時期とした。この時期に取り上げる文字資料は、あくまで中国あるいは事件全体の描写を目的としているため、蜂起の初期的段階であった調査地の情報は簡単に触れられているにとどまる。本シンポジウムのテーマと関連して興味深い点は、清朝と回民、そして漢族という三者関係のなかで記述が進められていることである。今日の「民族」とはズレがあるものの、少なくとも民族的基盤にもとづいた革命であるとする歴史上の位置づけを獲得したことは重要である。1941年に延安にて行われた毛沢東と馬思義の談話は、太平天国の失敗と同じく、プロレタリア階級政党的指導がないことで幾度も革命は失敗したとされたが、「回族革命」と言い得ることを確認されることで、後の資料収集と記録する意義を見出されている。これは事件の発生地とは関係のない場所で行われた決定であった。

事件に関する記述の量は③の時期になって急増する。地域で起こった出来事として地方志の一部に事件を記録している意味では①と類似するかのように思われる。だが実際には、部分的な記述の踏襲を除いて同じ事件の記述が大きく転換している。最大の変化は、①では事件の記述主体が蜂起の鎮圧側であったのに対して、③では回民の「起義」軍を主体としたことにある。この結果、情報の受け手としてどのような人々が想定されているのか不明確な記述に終始している。この枠組みがもたらした問題は少なくない。具体的には、蜂起軍という事件の主体は鎮圧の結果、西北方面へ移動しており、辛亥革命後になってこの地域に帰還した回民は多くはない、それもほとんどの帰還者は都市部を中心に分布しているにもかかわらず彼らを中心としたストーリーが編成されている。この地域が県西部の状況とは異なり、回民によってのみ構成される、いわゆる回民村はほとんど存在せず、かれらの主要な居住地は「漢回雑居」であり、両者には日常的な交流があったと考えられるが「民族」によって完全に区分される運動主体の闘争としか記述されない。また、蜂起へ積極的に参加しなかった人々は描かれることがない。同様に、中国近代史のなかで取り上げられていた清朝(満)、漢、回という三者関係ではなく、漢人と回民の対立としてのみ再記録化されている、などが指摘できる。

上記の記述のありかたについて、事件の主要な舞台となった地域の人々、少なくとも回民軍の拠点であった場所に今日居住する人々には知られていないことが重要である。かれらはまた現在の行政範囲の人口の2%前後(2000年)を占める回族との直接接触の機会もないこともあり、新たな歴史枠組みについて情報を得る契機から阻害されている。文字における地域史の変化が起こった一方で、当該地域では語りを通じた想像上の回民への認識が継続されており、この結果が、近年の文字資料を用いて現在の地域における生活者の歴史認識を説明できない事態を招いたと想定できるのである。

3 フィールドで語られる回民蜂起

上述の作業で地域にとっての回民蜂起の概略と、正史や実録ではなく地方志からみた回民蜂起は時代の要請する歴史記述のありかた、記憶のしかたに大きな影響を受けており、必ずしも一貫した像を結んでいない、つまり、文字による事件の説明のあり方にも変遷があることを確認した上で、つぎに回民蜂起について当該地域の記憶のあり方を取り上げる。ここでは主に慣行についての説明や伝説、世間話のなかで触れられた回民蜂起について事例を紹介する。

<報告で取り上げた10の事例については省略>

興味深いことにこれらの記憶のあり方は、文字資料①の時期の認識にもっとも近い。そして、近年刊行された、1956年から57年にかけて西北大学を主体に行われた実地調査(現地の人々への聞き書き、碑文調査)の成果と共通する部分も少なくなく、甚だしきは同一の情報と思われるものも認められる。注意深く制御された形ではあるが、80年代以降に編集された近隣農村における民間伝承集にも類似の状況が収録されている。このように、1949年以前の情報と聞き書きを主要な方法とした調査に共通点が見られる一方で、今日の地方志による記憶とはかけ離れていく状況を報告したい。

回民蜂起を歴史的な事件として伝えるこれらの伝承は、文字記録と比較すると、団練の頭目や將軍の名前、事件の時期など固有性が欠落している。ただし、文字記録が多い事件ゆえに、一致すると思われる個別の事件、事例、歌謡を見つけることが可能なものもある。それとは別に、生活の中に埋め込まれた伝承は、婚姻してはいけない村や変則的な人間関係、窯洞の掘れない場所や廟の靈験などの語りの中に分散しており、「事件」の調査としては現われにくい形で断片的に存在している。こちらは、事件史の語りよりも固有性が高く、様々な機会に発話され、再記憶化される機会が多い。その意味で、これを楊の先駆的研究に倣って「生き方の歴史」といってもよい(楊:2002)。1980年代以降、様々な学問分野から「社会的記憶」に関する研究が進められたが、そこでは実際に社会的記憶が体現、証明される事物や景観、行為が注目されてきた。その意味では、当該地域の回民蜂起のケースもまた、同様の傾向を有しているように思われる。

レジュメに載せた事例の中には、ある家庭の盛衰を説明する伝説のなかにも回民蜂起は用いられている。一方が事実として語られ、他方が本当かどうかはわからないものの、伝えられている伝説として語られる違いがあることから、同じレベルで記憶されていない可能性はあるものの、これらは話し、記憶を共有する価値のあるものとみなされている点ではかわりがない。また、先行研究の記述するような民族を単位とする漢回対立の先鋭化した記憶が現実性をもって語られる一方で、同じく先行研究に現われる羊の放牧、皮革製品の売買をめぐるトラブルに言及しつつも、回民軍にさらわれたことを契機に回民となり、その後帰還してからは再び漢人として生きる、あるいは、漢人が回民の義兄弟を通じて助けられるといった事例が語られる。このように、漢や回という不変の基準で人々が積極的に袂をわかって武力衝突に及んだという思考では理解し難い事例もある。これは「漢回雑居」と称された調査地域の特徴とも関連する現象と思われる。

1949年以降の努力の結果、地方志や新たに作られた記憶を固定化する各種資料を通じて回民蜂起に関する当該地域の住民のもつリアリティへと接近することは非常に難しくなった。その一例として、人民公社解体後の地名再設定の時期をここではとりあげる。地名を新たに検討する際に、回民の蜂起軍が命名した県名は村落名に残す一方で、紅旗公社といった全国に見られる名称も「清同治の時に回民起義を鎮圧した八旗の一つから命名するので、民族差別の含意がある。ゆえに地名一斉調査中に管轄内の古跡である某(報告者による省略)の名称からとって改名した」とする。周囲の村落の命名例から考えて、実際には八旗軍ではなく、移民の際に人々の分類範疇として「旗」を用いた可能性もあるがこうした検証はなされていない。

蜂起軍のある拠点だった場所は、蜂起軍による漢人の駆逐、清軍による蜂起軍の駆逐を経て無住の地となり、後に移民を配置することで村落名を改めた。この村では近年新たに建てられた石碑による紹介には「もとの名を某家溝(報告者による省略)といい、某姓が住んでいたことに名をとる。清同治の時期に甘肅慶陽の三つの姓がここに移り住み、「恭行仁義」から更に命名した」とあるよう

に、客民の村では成語や移民時の集団分類に名を求めることが多い。文字化され人々にも知らされる、つまり地域住民と今日の歴史枠組みの衝突が懸念される局面では、文字資料と口頭伝承の乖離を知る人々によって事件を語らず空白とする戦略がとられている。

この空白化する努力とは別の力学によって、陝西と回民蜂起の結びついた記憶は再び呼び起こされ、当該地域の生活者の伝承を越えて、広く流布することとなる。それは、陝西省で広く愛読されている新聞が旧ソ連にある「陝西村」を取り上げたことによる。ここでは、既に現代化してしまった今日の陝西省よりさらに陝西、関中らしい生活、方言を保持している村が発見されたことを報じ、その起源を、回民蜂起の主導者の一人である白彦虎の率いた部隊が旧ソ連に定住したことに求める記事であった(『陝西日報』〈週末版〉1991年12月、1993年12月)。

こうした空白化や、新たに回民蜂起に言及される契機となった断片的な記述のほかにも、ほとんど参照されてこなかった文字資料も存在する。それは、先述の口述資料と記述された資料を繋ぐような文字資料であり、最後にこれを取り上げたい。

革命史への社会的正当性が高まる中で、1956年から翌年にかけて実地調査が実施されているこれは西北大学歴史系民族研究室の編纂になるもので、4日間にわたって県人民委員会の手配のもと、聞き取り調査と碑文、書籍の調査を行っていた。起義の拡大地、主要な根拠地として選ばれた当該地域では、調査報告に合致しない記憶で占められていたので、報告書の序文に掲げられた目的、つまり人民の立場から回民の反圧迫、反搾取運動としての性質を描き出すことはできなかったが、調査時の口述記録を文字化している点で貴重である。ここに収められた伝承の一部は、今日の村で聞かれる回民蜂起の記憶と重なる事例を含み、フィールドで聞かれる語りに最も近いものとなっている。

次にとりあげる資料は、1989年に出版された地域の民間故事集成である。インタビュアーやインフォーマントの年齢、生活村落が記録されている事例もあり類似の書籍の中では完成度が高く興味深い内容だが、編集者の配慮により、回民蜂起の記憶を直接記載することは回避されている。しかし、村落の位置や歴史の説明、ある家族の風水の断絶の理由、甘粛へ向かう以前の左宗棠の伝説のなかに、わかりにくい形ではあるが回民蜂起の際の漢人の避難方法などが記されている。ここに記録されたいくつかの伝承もまた近隣集落に広く伝えられているものとほぼ同型である。

ここで挙げた二点の文字資料はいずれも村人に取材し文字化したものであり、取材時期が40年近く開いているにもかかわらず、共通する部分が少なくない。そして、この手法で得られた資料は、フィールドワークで得られる資料と同様に、今日の地方志における民族関係の記憶のあり方へと結びつかないのである。なぜ、歴史事象を軸に展開する民族の表象が、両者の間で接点を持たない並行関係にあるのか、この点を問題として取り上げない限り、類似の文字資料が増加しても今後も両者の乖離は埋まらないものと思われる(例えば邵宏漢、韓敏:1987、1992、杜:2000など)。

報告を締めくくるにあたって特記しておくべきは、ここで取り上げた記憶のありかたはおそらく歴史を再構成するという意味ではごく一面的なものにすぎないということである。実録や歴史檔案を用いるのではなく、事件後当事者のいなくなって久しい段階で形成された文字資料や、今日語られている記憶を対象とした以上、歴史的な意味での史料批判にたえるものではないだろう。同じく、先述した調査地の状況、つまり既に当時の回民の末裔が当該地域から追われたため居住していないという状況から、もう一方の語りをもつと思われる回族側の記憶を検討することができなかった。その意味で、ここで取り上げた事件の記憶は、あくまで事件の発生地では伝えられている、一方の当事者となるべき範疇の人々が不在のまま進められる漢族と回族のクロスオーバーのあり方であ

る。意義を見出された歴史事象が、その運動主体とされる人々の民族史のなかで描かれる機会が多いが、逆の立場の人々にも記憶は存在する。それが文字化されることが少ないことを踏まえて、あえて微視的な視点から革命前史に関わる大きなテーマを取り上げた。

ここで報告した回民の記憶が、今後、国家の歴史枠組みに回収されるのか、あるいは現在のよう
に、今日的な地方史と接点のないまま継続してゆくのかはわからないが、少なくともその行方は事件
の舞台となった地域固有の状況だけではなく、歴史記述の変化が起こったことと同様に、より大き
なレベルの変化の影響を受けてゆくものと考えられる。

資料の量、および考察について不十分であることを承知しつつ報告は以上として、今後の課題や
検討の方向性についてコメントいただければ幸いである。

《参考文献》

中田吉信

1959「同治年間の陝甘の回亂について」『近代中国研究』第三輯、近代中国研究委員会(編) 東京大学出版会

1993「中国における回族問題」『就実論叢-社会篇』No. 22、就実女子大学

楊海英

2002「十九世紀モンゴル史における「回民反乱」-歴史の書き方と「生き方の歴史」のあいだ-」『国立民族学
博物館別冊報告』Vol. 26、No. 3 国立民族学博物館

華源実業団(編)

1933『陝西長安県草灘、涇河永楽店農墾調査報告』 華源実業団発行

邵宏漢、韓敏

1987『陝西回民起義資料』 陝西省地方志編纂委員会

1992『陝西回民起義史』 陝西人民出版社

張寄仙(編)

1936『陝西省保甲史』 長安県政府保甲研究社

党晴梵

1931「陝西文化的過去與未来」『西北研究』第2期 西北研究所

杜建国

2000『同治年間西北回族起義史稿』 中共西安市委党校

馬長寿(編)

1993(1956-1957)『同治年間陝西回民起義歴史調査記録』 西北大学歴史系民族研究室編 陝西人民出版社

范文瀾

1953(1947)『中国近代史』上篇第一分冊(北京修訂版) 人民出版社

白寿彝(編)

1953 『回民起義』3巻 中国史学会主編 上海:神州国光社

その他、新、旧地方志、郷土志、檔案館所蔵地方記録、文史資料、民間伝承集成など

